

# Y Yokohama Art Site

Yokohama Art Site

特集

場を保ちながら



ティーンズクリエイション組織委員会「歌詞づくりワークショップ発表」(会場:横浜市栄区民文化センター・リス)

vol.

026

2021

特集

# 場を保ちながら



a.



b.

## レポート1

### ティーンズクリエイション組織委員会 「Wakamono Arts Festival」

#### もう一つの場所として

「ティーンズクリエイション」は、さかえdeつながるアートが母体となり、若者が自分を取り巻く環境や自分自身についてさまざまな気づきを得るために創作活動の場をつくる活動だ。今回で5回目となる「ティーンズクリエイション展 Wakamono Arts Festival」の企画や準備には、栄区青少年の地域活動拠点「フレンズ☆SAKAE」に集う若者も積極的に関わっている。

会場となった栄区民文化センターリリス・ギャラリーの入口には「レモンのように爽やかで、いちごのように甘酸っぱい、風のように一瞬の青い春を謳

歌する」と書かれた大きな書道作品が来訪者を出迎える。さらに進むと、絵巻物や粘土でつくった野菜、クラフトバッグ、便利グッズのアイデアを描いたイラスト、自身の内面を描いた絵画などが展示されている。

中学校・高等学校、特別支援学校等の部活動や教科、課外活動の作品に加え、さまざまな経路を経て、中高生世代の作品が並んだ。

会場内では、栄区に関するクイズを出す○×ゲームや演劇作品の上演、歌の発表も行われた。ふだん若者が過ごす学校や家庭以外のもう一つの場所ならではの多種多様な作品が生まれた。

#### 「誰も傷つけないこと」はできるか

演劇作品は、脚本・演出・キャストの全てを若者たちで行った。タイトルは「#信頼の意味」。学校で友人への不満を募らせた生徒が、SNSに悪口を投稿してしまったことから友人を傷つけてし

コロナ禍においても活動を止めないために

場を保ちながら行われるさまざまな試みをレポートします。

レポート1 ティーンズクリエイション組織委員会

レポート2 本牧こどもディスコ実行委員会

レポート3 病院と地域の協働によるおまつり実行委員会



d.



c.

a.b.d. 中高生世代による作品の展示のようす

c. 演劇作品(＃信頼の意味)

まい、SNSの恐ろしさに気づいてゆく物語だ。高校生の何気ない日常にもみえるが、そこに溶け込むインターネットによって、現代の若者が常に外気にさらされているという現状を憂いている。また、「誰かを傷つけること」への恐れも感じられた。誰も傷つけないことは、制作課程においてもテーマになった。どのようなテーマならみんなで取り組むことができるのか、話し合いが重ねられた。コロナ禍のためにマスクを着用して上演する姿は、現在の中高生世代がさらされている状況や時代の象徴にもみえた。

### 手話で歌う

歌の発表会では「歌詞づくりワークショップ」の参加者のティーンズが歌を発表した。この日は別室で歌と手話を行い、その様子の生配信が会場のスクリーンに投影された。別の日は会場で行われ、歌はワークショップ講師のみ、参加者

は手話のみ行うなど、コロナ禍によりさまざまな発表形式が試みられた。対面で歌えない状況のなか、手話ならば歌詞の内容を伝えることができるのではとみんなで相談し、地域でボランティア活動をする手話の先生から教わった。歌のタイトルは「大切なもの」。歌詞には「君も僕も『空気』なんかじゃない」や「君といると楽しいんだ過去の悲しみさえ」など、いろいろな思いを抱えながら書いたことがわかった。まっすぐな歌声と柔らかな手話に心を打たれた。

地域の文化施設と若者をはじめとする地域の人々がこのイベントを通してつながることで、居場所や表現の場が広がり、交友関係も生まれていた。

団体名：ティーンズクリエイション組織委員会

会場：横浜市栄区民文化センターリリス

URL：<http://www.sakae-art.jp>

## 本牧こどもディスコ実行委員会 「本牧こどもディスコseason6」 オンライン発表会

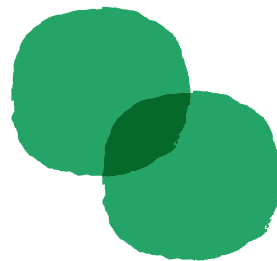
### 新しい記憶としてのフリーチャチャ

「本牧こどもディスコ」は、本牧アートプロジェクト（2014～2018年）のレジデンスプログラム「本牧AIR」をきっかけにダンサー・内木里美さんが2015年から開始したプロジェクトだ。

本牧にあるディスコは1970年代後半から80年代にかけて、ダンスステップのフリーチャチャを楽しむ人であふれていた。その文化を、フリーチャチャ全盛期の時代を生きた世代から、その時代をまったく知らない子どもたちまで、たくさんの地域住民に向けて発信しているプロジェクトが「本牧こどもディスコ」である。戦後37年間にわたって米軍のベースキャンプがあった影響下で生まれた本牧のダンス文化が、子どもたちによって、新たな街の記憶として刻まれることを目指している。

### おうちでディスコ

例年は実際のディスコ空間を再現してワークショップや発表会を行ってきたが、今年はコロナ禍の影響で練習も発表会もオンラインで行われた。発表会では、子どもたちは同じモチーフをあしらった衣装を身に着けて出演。衣装のおかげで、家がディスコ代わりでも気分が上がり、遠くにいる共演者たちと同じ舞台にいる心地になるようだった。子どもたちはリラックスしたようすで、とても楽しみながら踊っていて、配信動画を見ているこちらも自然とその空気感に乗って踊りだしたくなる。子どもたちは、テレビに映るスターのように、カメラに向かってポーズをとったり、目線を送ったりと、オンラインならではのカッコよさも引き出されていた。ディスコの空間がオンラインで実現し、コロナ禍で我慢が多かったであろう子どもたちの心の居場所をつくっていた。



a.



b.



c.

a.b.c. オンライン発表会のようす

団体名：本牧こどもディスコ実行委員会  
開催方法：オンライン

## 病院と地域の協働によるおまつり 実行委員会 「たのしいふゆのライブ2021」



### 支援する／されるを越えて

病院と地域の協働によるおまつり実行委員会は、病院で行われるお祭りを企画、実施することを目的とした実行委員会で、精神障害当事者、支援者、病院スタッフなど、精神保健福祉に関わるさまざまな立場の人たちで構成されている。支援する／される関係に固定されない、対等な立場で関わり事業を進めている。例年は病院内で行われてきた企画だが、今年はコロナ禍により、院内でのラジオ放送とライブ配信で活動が行われた。

夏と秋に行われたワークショップでは、オリジナルバンド「THE PUSH」のラジオ番組が作られた。病院の患者が書いた手紙を歌詞に歌をつけ、ほかの福祉施設の利用者が歌ったり、詩の朗読が行われたり、はたまた恋愛とは何かを語ったりと、みんなで談話しているような時間が実現していた。コロナ禍により集まることが難しいなか、ラジオによって居場所がつけられていた。

### おたがいに楽しむ音楽

1月には「たのしいふゆのライブ2021」と題して配信でのライブが行われた。ライブはオンラインツールで病院や福祉施設をつなぎ、入院している患者や福祉施設利用者が参加できるかたちにとられ、病院の利用者からリクエストされた曲やオリジナル曲などが披露された。オリジナル曲の一つに、利用者が歌詞をつかった歌があった。その歌詞は、今まで出会ったヘルパーや訪問介護、これまでに利用したデイケア、そこで出会ったガールフレンドや行きたかった場所

などが回想され、最後は今いるデイケアがお気に入り入りで最高の気分だ、と結ばれた。曲調と相まって、聴いていると人生を共に辿るような温かい気持ちになる。ほかにも参加者がアカペラで歌ったり、楽器を演奏したり、仮装してリズムにのったりと楽しい時間を過ごした。支援する側が支援される側を楽しませているのではなく、みんなが一緒に楽しむ時間をつくりあげていた。



a.



b.

a. 福祉施設と病院とライブ会場の中継

b. ライブ演奏の様子

団体名：病院と地域の協働によるおまつり実行委員会  
開催方法：オンライン

テーマ

## コロナ禍でみえてきたこと——演劇はつづく

ゲスト



佐藤信さん（若葉町ウォーフ）

聞き手・進行

小川智紀

日時

2021年1月12日(火) 13:00-14:00

場所

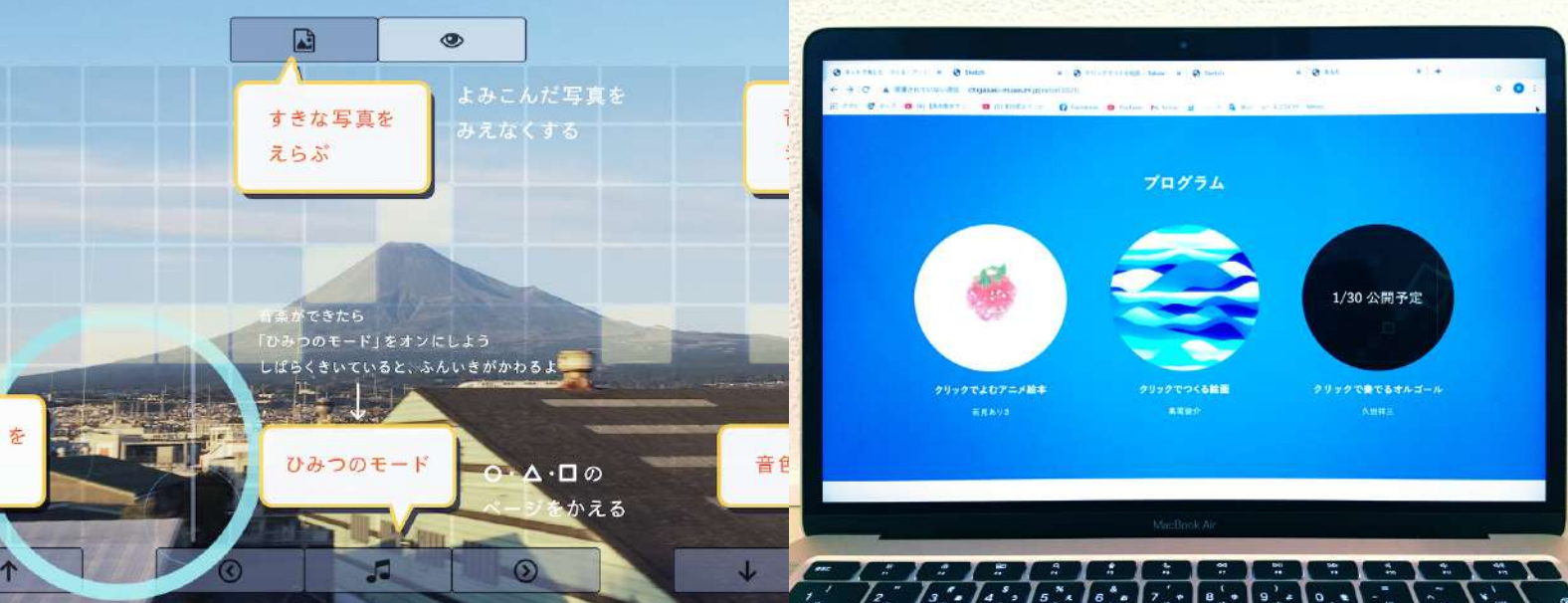
若葉町ウォーフ

「若葉町ウォーフ」は、ヨコハマアートサイト2020 参加事業「まちなかギャラリー」の展示会場となった劇場のほか、スタジオ・宿を兼ねたスペースです。コロナ禍において、若葉町ウォーフの活動を止めてはいけなさと感じた佐藤さんは、施設としてではなく「空き地」として開放しようと考えました。そこで、2020年7月6日〜23日の間、施設の真っ白な壁にアーティストが壁画を描き、まちなかギャラリー2020「壁展」として地域にひらきました。さらに展示にあわせて「とまどいの壁」と題したチェロとダンスの即興演奏を行いました。

「マスクの逆襲」展を開催。五〇〇個の白いお面をつくり、装飾を施して返してもらおうよう近隣に配りました。帰ってきたお面は四五〇個。しかも、一つひとつの出来がよかったとのこと。12月15日〜22日の期間で行われた書道の展示では、書家の方が会場のコロナを表した壁画に呼応し、この時代へのメッセージを書きたいと申し出たそうです。そのメッセージを能楽師に読んでもらうパフォーマンスも上演されました。佐藤さんは「こんなふうに活動をしていたら、ここに演劇の要素がすべてあると思えた」と語りました。

かつて三〇〇人程度以上が普通だった演劇。その規模を小さくした小劇場が定着するまで三〇年間に渡ってその流れを牽引してこられた佐藤さんは、もう一度その原点に立ち、上演形態を二〇人くらいでも継続できる方法を考えていきたいと、コロナ禍の状況が続く未来も見据え、今後の演劇の在り方についても言及しました。





左:クリックで奏でるオルゴール(久世祥三・作)画面 右:茅ヶ崎市美術館オンラインミュージアム・教育普及プログラム「ネットで楽しむ・つくる・アート体験」画面

## オンラインによる「もうひとつの展示室」 変化する時代をアピコラージュで前へ

寄稿：藤川 悠

ヨコハマアートサイト2020 選考委員会のメンバーで、茅ヶ崎市美術館 学芸員の藤川悠さんが、  
コロナ禍において新たに試みた教育普及事業について、  
変化する時代に大切にされている目線と合わせてお話をしてくださいました！

私たちを取り巻く環境が刻々と変化するなかで、みなさん、いろいろな思いとともに毎日を過ごされているのではないのでしょうか。美術館では、展覧会は再開できているの館は多いものの、人々が直接集まって行うワークショップなどの教育普及プログラムの開催は、まだまだ難しい状況にあります。

そこで、全国のミュージアムが取り組んでいる「おうちミュージアム」という家で楽しめる工作や映像を参考にし、私が勤務する美術館のホームページでもオンラインでできる教育普及事業を展開しました。インターネットを介して、皆さんが思い思いの場所で体験していただけるように、さらにオンラインの特性を活かしたプログラムにするため三人のクリエイターの方に協力してもらいました。クリックする指先の動きにあわせて変わるアニメ絵本、マウスを動かす位置で変化するプログラミングでつくる絵画、画面をクリックすると鳴る音と音をつなげて人にプレゼントすることのできる音楽など、これからの時代に向けた一つの試みとして、新たな鑑賞と創作の体験を美術館のホームページからお楽しみいただけたいと思います。

実践してみえてきたのは、オンライン事業はもう一つの展示室や作業室を手に入れたということかもしれないということです。もちろん、物理的な条件が違うので戸惑うことが多いのが正直なところです。ただ、最近、私が大切にしているのは「アピコラージュ」という考え方です。フランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースが提唱したもので、その場のありあわせの道具と材料で必要なものをつくりだすという意味があります。まずは自分の身の回りを見て何ができそうか考える。自分だけで難しい場合は、得意な人をみつけて相談する。自分が得意なことはお返しする。そうやって、互いの得意なことを寄せ集めて、さまざまな条件のもと取り組んでいく手法が、いつでも変化しつづける時代を過ごしていくヒントになるような気がしています。



藤川 悠

ふじかわ はるか 茅ヶ崎市美術館 学芸員

大学では環境空間や建築について学び、広島市現代美術館、森美術館、東京都現代美術館の勤務を経て、現職。現代美術を専門とし、地域とアーティストをつなぐ教育普及活動を積極的に行う。近年はアーティストや障害のある人とともに、視覚以外の感覚も使ったアートとの関わり方も模索し、ミュージアムが果たしうる社会的機能の拡張を目指した展覧会やプログラムを実施。その他、文化庁メディア芸術祭アート部門選考委員、文教大学、女子美術大学で非常勤講師を務める。プロフィール写真©Ben Matsunaga

# 事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の  
あっちこっちへうろうろしています。



11月27日金曜日

パフォーマンスグループ、TalkingKidsHi5の「Partyを作ろう」が横浜赤レンガ倉庫にて開催された。ショーから始まり、パーティーの企画書の作成と発表、最後は企画を組み合わせて実演した。この日はパーティーの給仕係がみんな踊りだすなどユニークなパーティーが完成した。

12月2日水曜日

外国をルーツに持つ人々が多く暮らす若葉町へ。シネマ・ジャック&ベティで行われた「よこはま若葉町多文化映画祭2020」でマレーシアを舞台にした《タレントタイム〜優しい歌》を鑑賞。アフタートークと交流会では日本に暮らすムスリムの方々からお話を聞き、会話を楽しみながら多文化への理解を深める時間となった。



1月23日土曜日

みんなで作るアートのおまつり「egao フェスティバル」をオンラインで鑑賞。パフォーマンス動画には、ダンスや歌、ギターの弾き語り、漫才などあり、障害のある人、若者、子どもなど多様な人たちがのびのびと表現していた。ほかにも平面・立体造形作品、ワークショップ映像などを観ることができる。おうちに居ながらも地域とつながっている感覚に心が温まる。

3月1日月曜日

ヨコハマアートサイト2021の募集を開始しました。2021年度もヨコハマアートサイトは横浜の地域文化を支えるアート活動を応援します。みなさまぜひご応募ください。募集期間は3月1日(月)～4月6日(火)です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

横浜のアート活動を応援する助成金

**ヨコハマアートサイト**  
Yokohama Art Site

申請受付期間  
2021年3月1日(月)～4月6日(火)

## ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

## 事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人 STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団）  
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル 208（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部 内）  
TEL:045-325-0410 FAX:045-325-0414 MAIL:office@y-artsite.org http://y-artsite.org

@Y\_Artsite ヨコハマアートサイト ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

## 季刊ヨコハマアートサイト vol.026

発行：ヨコハマアートサイト事務局 編集：認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力：本のモ・クシュラ 取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実  
デザイン：小池佑子 撮影(表紙・特集)：金子愛帆 印刷・製本：共進印刷株式会社 発行日：2021年3月31日  
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。